

焼畑の村・クミにて—フィールドノートから

八田 洋章

1998年暮れから1999年2月初めにかけて、エチオピアの熱帯雨林の中で、マジャンギルの人々と生活する機会を得た。植物形態学の専門家として、1992年以来この地に入って研究を続ける若い人文地理学徒、佐藤廉也氏の植生調査のお手伝いが目的だった。私にとっては30年来（ユーラシア大陸をヒッチハイクした際、ジブラルタルを渡ろうかと迷った末断念した）の念願のアフリカだった。比較的丁寧に綴ってきたフィールドノートのほんの一部を生のまま修正を施さずにここに転記して、私がかの地で感じたことを伝えたい。ノートから生のまま載せたということで、内容は一貫したものではなく読みにくいところがあるかもしれないが、臨場感を持たせるものとお許しいただきたい。今回の機会を与えられた、京都大学の福井勝義教授、同行して私に素晴らしい体験を共有させてくださった佐藤廉也博士に心から御礼申し上げる。（ただし、以下の記録は私個人の感想、意見に基づくものであり、佐藤氏の現地に対する考え方とは全く無関係なものであることを念のため申し添えておく。）

マジャンギルはエチオピア連邦共和国西南部のガンベラ州、南部民主州、オロモ州にまたがる森林地帯に生活する民族集団である。南部スーダンに連なる低地とエチオピア高原の漸移地帯にあたり年間雨量も1700mm前後ある。森林の中で住居や集落の周辺の植生を伐採して焼畑農耕を、さらに周辺の森林で蜂蜜採集、狩猟活動中心の生業活動を行う。

1960年代まで、小規模な世帯を基本とし、離合集散する戸数2～10程度の集団で集落を形成していたが、メンギスツ政権による集住化政策に対応して、いくつかの百人を超える行政村を形成するようになった。また、1960年代から70年代にかけてアメリカのミッションによるキリスト教布教活動があったが、集住化と同時にキリスト教の受容もすす

んだ。これらの過程をへて、さまざまな生活の変化を経験してきている。今回滞在したクミ村は、ガンベラ州ゴダレ郡の行政府所在地メティから西へ30キロほどの距離にある、人口5百数十人の村である。

生水が飲め、マラリアの心配もない

「ディゴイエー」、「ディゴイ・ディゴイ・ディゴイエー」とはまことに便利なあいさつ言葉である。朝も、昼も、夜も「ディゴイエー」といって笑顔を見ればよい。それに倍する笑顔が返ってくる。ほとんどの人と握手を交わす。握り締めれば倍する力で返ってくる。

生水が安心して飲め、マラリアの心配もない。恐らく盗難も無い。子供たちは、アジスアベバで辟易したような物乞いをするなど一切無い。子供がいたずらをすると年長の子がきびしく戒める。

人々の表情の良さ、どうしてこんなに穏やかで、心豊かな表情が保たれ続けてきたのだろう。食事でもなんでも訪れたものを絶対拒まない。あればその人に差し出す。離婚したり、男がいなくても互助の精神でとにかく暮らしてゆける。だから私たちも食客として受け入れられたのだ。文明社会ではとくに失ってしまったような、この人と人との暖かな和が密林の隙間で生き続けてきたのだ。

3、4歳の、同じ年齢くらいの子供らが10人ほど、いつも我々の邸宅の前の広場でころげまわり、もつれ合ってにぎやかに遊んでいた。親はどの子にも分け隔て無く叱る。また年長の子が年少の子に結構きびしい。怒られそうになるとクモの子を散らすように散り、すぐ元に戻って遊ぶ。私の世代の子供の頃はまだこれに似た状態ではなかったかと思う。自然の子らである。幼児はすべて素足で遊び、婦人や男達とてさほど変らない。素足の生活が可能なくらい

安全だという事でもある。衣類も子供らはほとんど裸同然の着古したぼろを纏っているに過ぎない。それで済ませられるだけの暖かさに恵まれているのだ。

熱帯の夕暮れは早い。日が沈み始めたと思ったらすぐ暗くなる。真っ暗な闇の中で、縁者や近所の皆さんが集まってお喋りが続く。この雰囲気だって私には全く夢みたいな体験である。アフリカの人たちと共に、丸い小さな小屋の脇の大木の下で、野外の台所も兼ねたような、タロイモを煮る火を囲んでいるのだ。佐藤さんは、このような時間帯が情報を得るのに最も大切な時だという。星がやけに輝いて見える。婦人たちはよく喋り、よく笑う。言葉をも含めて、これほど日本での日常とかけ離れた生活体験はこれまでの私には無かった。私が過去に経験した、ヒマラヤやバヌアツのテント生活とは意味が違う。いずれにしろ大変な場所に我が身を置いているのは確かであった。

朝7時半頃には数冊の教科書やノートを抱えて子供らは学校に急ぐ。日本で学齢期にあたる子供に加えて、青年たち、それに十分な大人も混じる。私たちの調査をいつも手伝ってくれるクシエン君も学校があるため土、日以外の午前中は加われない。彼は7年生とのこと。時々じっと教科書とにらめっこしている大人達の姿を見ることがある。今朝佐藤さんに英語を教わりに来た青年がいた。この村も変っていくだろうと思う。

現地にとけこむ要件

佐藤さんは6年前にここ、クミ村に始めてやって来た。6年といえば生まれたばかりの子が6歳になるほどの時間がたっているということになる。誰からも「サトー」、「サトー」と声がかかり、彼は誰にも丁寧に対応し、相談にものり、時に冗談を言って、みなを笑わせている。彼の生来の生活のリズムがこの人たちのリズムにぴったりなのだとさえ思わせる。

村人の溢れる善意は佐藤さんへの信頼であり、敬意の表現であろう。彼はこの村の人たちに対し、殊に食事その他お世話になっているガブリエル・ベレバ夫妻に対し、徹底した誠意で答えている。好意を無にするとということが絶対にといっていいほど無い。例えば時にトウモロコシのインジェラとワットを私たちの小屋に届けてもらうことがあると、私は

(2人だけで食べる時にはとくに) ケチャップなどを振り掛けて食べるのだが、彼は出してもらったそのまま、残さないように無理をしてでも食べた。私はこれがこの場所における誠意というものであろうと納得した。その態度は側で見ていて快かった。私は彼から多くの事を学んだ。そして佐藤さんが選んだ研究対象としてのこの人々が素晴らしい民族である事を喜んだ。

「伝道者オドラ (1960年代からはじめてキリスト教の布教活動をおこなったアメリカ人宣教師) は彼らに教える人だったが、私は彼らから学ぶ人ですよ」「マジヤングル語を話せる外国人が世界で5人もいないと思うと勉強するのも楽しかったですよ」と佐藤さんはさりとてのけるが、彼らの言葉で、老人とも子供たちとも自由に会話ができる事がこの種の研究の基本的な要件だと理解できた。そのことが人々の信頼を得るうえで大きく作用したに違いない。

村のメイン通りに面する一角で、老人達がタージャンと呼ぶ濁酒で宴会をやっていた。まだ始まったばかりで、静かだったがやがてダンスさえ始まるようだ。若者達はキリスト教受容に伴う禁酒運動のため、ほとんど酒類を飲まない。それで互いに離れて暮らしている老人達がたまに集まって宴会となる。酒を仕込んだと聞いて近隣の村からも老人が集まってくるのだそうだ。1つの酒器から2人が顔を突き合わせて一緒に飲む。自分も隣の男と口を合わせて一気に飲んだ。「八田先生はすごい適応力ですね、はじめてでそこまでやれる人はあんまりいませんよ」と佐藤さんがほめて(?) くれた。以後私は長老組みに入れてもらい、しばしばタージャンや蜂蜜酒に酔いしれた。実際年齢でも私は立派な長老組みの資格があったのだ。

「棒根」やスナノミのことなど

森を歩く毎に気になっていたのだが、この森の巨木群には板根の発達する個体が非常に多い。そして2つのタイプがあることに気づく。いわゆる板根は名のとおり、東南アジアで普通に見かけるように、若い時から幹の基部が数片の薄い板状に発達するのだが、ここには、若い時幹の周りがまるで丸太で取り巻かれているような状態で、それが幹の肥大に伴って、基部が板根状に発達してくる。つまり翼の数が極端に多く、翼と翼との間が狭く深い空間とな



斧1つで倒された *Aningeria* の幹の断面。「棒根」が成長するとこのように深いひだとなる

る。これは板根の範疇には入るには相違無いのだが普通の板根とは発生の段階から異なるよう観察される。人々はこの空間を利用して、芋類の貯蔵庫の代用としたり、この空間で壺を焼いたりして利用し、さすが森の住人の感が強い。佐藤さんはこれを「棒根」と名付けた。あまりぱっとしない命名だが今のところ他に妙案が無い。

ドゥエ (*Duwe*) と呼ぶ木がある。学名は *Baphia abyssinica* という種で、心材部がくっきりと濃い褐色で特徴的。人々はこの木の心材部で杵をつくり、斧の柄などに利用する。重くて硬く、それだけに火持ちがよく、備長炭のウバメガシのようなものだ。佐藤さんがマジャンギルの言い伝えだといって、この木にまつわる以下のような話をしてくれた。

「昔、太陽と月とが大喧嘩をしたとき、ぶつかり合って、両者は落ちてしまった。太陽の落ちた所がドゥエの燃えさかる火の中だった。それにたいし、月が落ちたのがアーベ (調査地で多く出現した赤い肌の大木でイチジク属) の湿ってなかなか燃えない所だった。それ以来太陽は真っ赤に燃えるようになったのに対し、月は冷たいままである。身近な樹木が太陽や月と直接結び付けて語られる点、非常におもしろく、人々の樹木に対する思ひ入れの深さを忍ばせて興味深い。

シーメという木本のつる植物は、茎を1mほど切断して、あふれ出る水を

飲んだ。樹液は根群から葉群へと連続する1本の引っ張り合う毛管流であろうから、上方から空気を入れてやらねば流れ出ない。本当に水がほとほとしたものである。いくらか青臭いような味がした。けっさくだったのは同行のアラジャール氏がおもむろに背広の内ポケットから石鹸を取り出して手を洗い出した事だった。彼は風貌もさる事ながらダンディな男で、いつもジャケットで身を固めていた。

滞在中最も素晴らしかったことの一つは白と黒の毛皮に包まれた小型の樹上生活者、コロブスの声だった。身体の大きさに似ず、吠え声は大きい。森のいたるところの巨木の樹冠部で群れていた。それは夜明け前の6時頃から、時に4時、5時頃から始まった。遠くの方からだんだんと吠え声の合唱が伝わってくる。どこかで1頭が吠えだすと、それに呼応して、次々と、ひとしきり吠える。波状となって、木から木へとジャングルを伝わってくるのだ。小屋の中のベットに寝ていても外にいると同じに聞こえる。そしてやがて遠のいていく。私は村を離れる直前、小さなテープレコーダを手にも2度夜明け前に小屋を出て森に入った。ぐるりと巨木群に囲まれた小さな焼畑のギャップで待つ。30分は待つ。うまく巡り合わせると、だんだんと吠え声の合唱が近づいてくる。私の目の前の大木の樹冠部で、後方の頭上で、一斉に吠え出す。まるで大自然のオーケストラを聞く思いだった。まさに恍惚の一

クミ村の女性。お化粧に余念がない。



時だった。私はこの声を聞くためにだけでもこの森を再訪したいと思った。一度この渦が過ぎ去るとまた1時間近くやってこない。7時10分過ぎ、ジャングルの巨木群の茂みの間から、太陽が顔を出し、森にたたずむかやぶきの小屋の屋根からやんわりと煙が立ち昇り始める。起きだした老人や婦人達と「ディゴイエ」と声を交わし、自分達の小屋に戻る。すっかり明けてしまうとコロブスの合唱は聞かれなくなる。

クシエン君は足裏の指の先を尖った枝の先でほじくって、スナノミを取り出した。0.5mmほどのいかにもノミという感じ。これが皮膚の下に潜り込んで巣を作り、産卵を続け、直径2-3mmの卵のうを作るのだ。命に別状があるわけでないのだが、ほおっておくと傷口が大きくなって、化膿する心配がある。

私は全然気付かなかったのだが、いつのまにか右足の裏にスナノミが巣くっていて、皮膚を通して白く見える。ガブリエル氏が安全ピンで米粒大の白い卵のうを取り出してくれた。ピンの消毒も兼ね、ピンに突き刺して蠟燭の火で死刑にした。こんな体験があり、十分気をつけていて、しばしば足の裏を調べてはいたのだが、ある時気づいたら何と両足の指先がぼこぼこに膨らんでいた。数えると7ヶ所に白い卵のうが透けて見える。この時はちょっとした手術だった。十分消毒をし、化膿止めの抗生物質をのんでおいた。生活に慣れるにつれて横着になり、油断したためだ。「はじめは誰もがこんなものですよ」と佐藤さんが慰めてくれた。

素足で駆けまわって遊ぶ子らが常にスナノミに取り付かれるのは当然である。母親に足を抱えられ、安全ピンで大きな卵のうを取り出される時の彼女らの泣き声は痛ましかった。大抵は痛がって暴れるから、卵のうはつぶれてしまう。母親はそれを絞り出しては木の葉でぬぐっていた。小さな足の指の付け根には5mmくらいの穴がいくつもあいていた。見らはこうしてたくましく育っていく。

「食客の食客」のことなど

1月17日の朝食は小さなバナナ1個ずつがあてがわれただけだった。私はそれを美味しく食べ、そして次を待つが、肝心のベレバさんが外に出たきり戻ってこない。トウモロコシの製粉のため杵を振り下ろす音がする。男達の話聞いていた佐藤さんがつぶやいた。「いよいよこの家も食うものがなく

なってきたのかな」、「彼らはどこへ朝飯を食いに行こうかと相談をしますよ」という。やがて2人はいなくなり、残った4人は連れ立って、「南の方に行って食べ物にありつこうとしているですよ」とのこと。

まさに我々は「食客の食客」である。どこかで今朝の食事にあやかするために、大の男4人がさまよった。15分ほどで心づもりの家についた。ところが他に2、3人の男達がすでにいて、引き返してきた。「もうその家でも今朝の食うものがなくなったそうです」と佐藤さん。結局、別の家庭でさつまいもをごちそうになって帰って来たのは昼近かった。この一件はいろんな事を示唆する出来事だった（ただし、このような体験はこの時限りであって、その日の昼食以後、村を離れるまできちりと朝、昼、晩にタロイモやトウモロコシのごちそうになり続けた）。

それにしても男達が暇をもてあまし気味なのに対し、女性の方は忙しい。ほとんど身体を休める間が無いくらいに食事の準備に追われる。スーパーで買ってきてレンジでチーンというわけにはいかない。芋類やトウモロコシの収穫から始まる。畑から籠いっぱい背負って帰り、合間に種子を殻から外す。ドウエの心材で作った棒丸太の杵をふるって製粉するが、これが重労働である。婦人達は腰のパネを旨く使いながらひと振りごとに気合いを入れて打ち下ろす。ドウエの杵は重い。小さな臼から粒がこぼれ出る。時に2人がかりでつく。次いで、器用に風撰して皮を外し、精製する。彼女らは朝から晩まで男たちや、近所の縁者に食わせる食事の準備をしているように見える。

コーンコーンともカーンカーンとも聞こえた。男が1人、パンツ1枚で巨木に斧1つで挑んでいた。直径2mになんなんとする、板根の発達した巨木のまわりにやぐらを組んで、地上2m余のところに斧を入れる光景は私にとって、まさに映像の世界の出来事だった。どんなに感動をもって眺めたことか。樵氏は私がカメラを向けているのに気付くと急いでシャツとズボンを着け、そしてにやりと笑い、再び斧を振るった。

蔓や低木類が切り払われた二次林の林床は温帯域の落葉広葉樹林のように枯れ葉に覆われている。但

し落葉の堆積はない。かさかさとした音を立てる。常緑樹と落葉樹の割合はどうか。大部分の樹種は乾期の今も葉を付けているように見える。が落葉樹も多いはずで、落葉してもすぐに新葉を吹き出すのだろう。隣接する原生林に入ると陽光は薄くなり暗い。ショウガ科の白い花が目立ち、野生の小さいトウガラシの紅い実が美しい。林縁の道沿いにはイノコブチが多い。ヒヒのウンチは人間のそれのように臭い。時々ジャッカルの糞もある。頭上ではコロブスが群れて枝を揺さ振っている。

森の中はまことに静かで、しっとりと息づいている。ジャングルとはこういうところなのだろう。樹高は *Aningeria* 属の45mに達する超高木があるが、普通は30m前後の林冠でうっ閉している。自分は確かに本物のジャングルの真っ只中にいて、ここの住人たちに混じって生活したのだ。

一次林伐採のこと

焼き畑が熱帯雨林激減の一因であるという意見は根強い。自分はそれは誤解だ、伝統的な焼き畑はそうでないと思ってきたし、今もそう思っている。ク

ミ村で見るかぎり放棄された跡地の植生回復も早い。佐藤さんによればマジャンギルの人々はジャングル無くして生活が成り立っていない事を熟知しているという。しかしである。この乾季に森が切り払われただけでもかなりの面積になる。私が見たのはごく小さなクミ村の周辺にすぎないが、マジャンギルの村々は多数ジャングルに散在する。これは限られた面積にすぎないエチオピアの森林にとってはかなりの圧力となっているには相違ない。人口の増加が心配である。佐藤さんとは必ずしも意見のあわぬところであるが、私の感想としては、このままでは自分の首を絞め続ける結果にならないとは限らないように思われる。宝の森を自分たちで消費し尽くしてしまわないうちに効果的な歯止めが必要であろう。私に素晴らしい体験をプレゼントしてくれたマジャンギルの人々に対し、一般論としての安直な批判をする気は毛頭無い。ただこの人々にとって、早く手を打たねば、という漠然とした不安に駆られたのである。

(はった ひろあき

国立科学博物館筑波実験植物園)

北東アフリカ情報ネットワーク

Vigilance Soudan 英語版創刊

スーダンにおける人権と自由の問題ととりくむフランスのNGO、*Vigilance Committee for Human Rights and Liberties in Sudan* は1992年から月刊ニュースレターを刊行しているが、1997年暮れに季刊の英語版ニュースレターを創刊した。問い合わせ先：BP 184, 75665 Paris Cedex 14, France. E-mail: vigilsd@club-internet.fr Web site: <http://www.club-internet.fr/perso/vigilsd>

北東アフリカのニュースを知るための Web Sites

アフリカのニュースの報道がきわめて貧弱な日本のマスコミに不満な方は、まずBBCに

アクセスすることをお薦めする。<http://news.bbc.co.uk/hi/english/world/africa> 全アフリカからのニュースがそれぞれ分刻みで送られてくる。音声や映像で情報を得ることもできる。また、関連するサイトへのリンクも整備されている。

国別のニュースを得るには、AfricaNewsが便利である。<http://www.africanews.org/east/> のあとに国名を付けてアクセスする。さまざまな特集記事もある。また、ケニアのDaily Nation、エチオピアのAddis Tribuneなどの主要な記事も、それぞれの新聞のサイトで閲覧できる。<http://www.nationaudio.com/News/DailyNation/Today/index.html> <http://AddisTribune.EthiopiaOnline.Net>

栗本英世